

	項目	評価単位	評価のまとめ
A 普 通 教 育 課 を 程 行 う 学 校 園 と 校 運 営 て	1	1. 教育目標	○教育目標は、幼児の実態と教師の願いをふまえた内容になっている。 ○年度当初の共通理解と学期末年度末の反省・評価の話し合いを今後も重ね、見直しにつなげていきたい。
		2. 教育課程の編成	○環境を意識し新たに教育課程を見直すことができた。 ○「学びの概要」の内容と実践が結びついてきている。年度末に、その年の実践をもとに「学びの概要」を見直ししていく必要がある。 ○園舎内環境、園舎と園庭をつなぐ環境を研究会で取り上げ、環境を改善していくことにつながっていった。研究のテーマと「学びの概要」のつながりをもっと深くしていく必要がある。
		3. 年間授業日数・時数	○接続期前期(年長10月～)は、幼小接続を意識し保育時間を15分延長したことで、活動の充実など効果があった。 ○保育時間変更のお知らせは、早い時期に伝えるようにしたい。
		4. 教育活動とその成果	○環境の特色を共通理解し、環境を活用したりカブラなど教材を工夫したりする中で、遊びの充実や深まりが見られた。 ○接続期前期におけるチーム活動(2クラスを解体、4チームでの活動)を計画的に実施し、成長につながった。 ○スクールカウンセラーを交えた研修会を計画的に実施し、個々に応じた援助について共通理解を図り、援助につなげることができた。 ○朝会で各学年の情報を伝え合うことが定着してきて、より連携して保育ができるようになった。
		5. 行事	○9月の年長組バス遠足を見直したことで、運動会へ向けて集中して取り組むことができた。毎年度、思い切って見合わせたり、新しく取り入れたりなど、積極的に工夫改善していきたい。 ○年長2学期の協同を意識した活動(地球ワールド)については、一定の成果があったと思うがそのことが保護者に伝わりきれていないことを感じる。行事のねらいやその中で子どもたちに経験させたいと思っていることについて、保護者に伝え理解を得ていきたい。
		6. 進路指導	○小学校の学校説明会等を受けて、面談を2回実施。育ちを振り返り、進学について真剣に考える機会として大切に実施した。 ○園の教員全員での一人一人の幼児についての見直しとともに、スクールカウンセラーとの連携が定着し、保護者への対応に深まりと具体性もてた。今後は、さらに年少・年中の時から、見直しをもった進路指導の積み重ねが課題である。
		7. 研究・研修	○研究主題「環境に対する豊かな感受性を育む」の4年目であり、3年目に引き続き、園内の場にかかわる事例を出し合い、検討する中で、場の特性を明らかにしながら、空間が場になっていく過程をたどり、研究を深めた。3～4年目の研究成果を紀要にまとめ、関係諸機関に贈呈するとともに、希望者に対して配布し、研究成果を発信した。 ○公開保育を年2回実施、全国から計約120名の参加者を得た。参加者は、幼稚園、小学校、保育園、子ども園等教育関係者、大学、暖気大学等養成関係者、教育委員会等。 ○研究費を活用し、各自が研究目的を掲げ、書籍購入、他園参観、施設見学等を行い、その成果を研究会の中で発表し、情報の共有を図るとともに、保育の充実につなげることができた。 ○連携研究では、「相互交流」「発達支援」「幼小接続期」の3部会に参加、発達支援部会と幼小接続期部会の責任者を務めた。全教員が積極的に他附属や大学教員と連携し研究に取り組んだ。
	II	1. 経営・組織	○園務分掌は確立してきており、担当者に任されることが増えてきている。報告、連絡、相談の意識をしっかりとつことがポイントになる。 ○大学との連携は密になっており、安全で安心な幼稚園運営ができています。 ○放射能のことでは、大学からの発信があり、職員も保護者も安心して生活できた。防災体制全体についても同様である。 ○附属学校部から幼稚園担当の事務職員により、大学本部、他機関との十分な連携が保たれ、安定的な園運営が実現した。
		2. 出納・経理	○各担当が年度当初に計画をたて、年間を通じて有効にお金(教材費等)を使うことができた。 ○使用状況が随時報告され、保育に反映できる支出ができた。
		3. 施設・設備	○定期点検の結果を養護教諭が一覧表にまとめて提案することで、全体の様子がわかり、改善整備が進みやすくなった。 ○教材室は革新的に整備され使いやすくなった。アトリエの整理棚も充実し、楽器、絵の具、調理用品など整理され使いやすくなった。保健室も本の整理がすずんだ。
		4. 健康	○養護教諭による「保健室だより」の発行を継続的に実施、健康への意識啓発につながった。 ○スクールカウンセラーを講師に迎えての子育て懇談会(4歳児の保護者対象)の実施。スクールカウンセラーに対する親しさを感じ、相談できる雰囲気づくりを重ねている。 ○メンタルヘルス調査とその後のカンファレンスが有効に活かされているが、年2回の実施を目指したい。
		5. 安全	○防災体制を見直し、訓練を積み重ねることができた。 ○他附属の情報も得て、今まで備蓄されていなかったポータブルトイレ等の補充を行うことができた。大学からの発信で、さらに3日分の備蓄に向けて補充を進めている。 ○けがで病院に行くような場合の対応・連絡の徹底など、情報を整理し共通理解を図ることが課題である。
		6. 情報	○幼稚園のファイルシステム(共有フォルダー)を整備し、有効に活用され、各自の意識も高まっているが、さらに一層の危機意識を持つ必要がある。 ○緊急メール配信システムは順調に稼働、情報が迅速に正確に伝わっている。 ○ホームページの情報更新は従来より迅速になってきている。他附属等の情報を適宜収集し情報として公開すべきものは対応したい。
		7. 開かれた学校	○保護者から多くの協力を得ることができた。保護者との一体感が増している。 ○学校評議員会を年2回開催した。幅広い立場からの意見をいただき園経営に生かすことができた。 ○保護者に対して、研究内容、教育内容についての伝達をさらに工夫する必要がある。
		8. 入園検定	○検定にかかわる問い合わせについて、大学と連携をとって対応し混乱はなかった。 ○適切な準備、実施後の記録の積み重ねができています。
		9. 保護者との連携	○講演会2回、年中保護者対象子育て懇談会1回、親子体操の会3回、延べ6回実施。 ○保育参加や保育ボランティアの中でスタッフとして保育にかかわる中で、幼稚園の教育を理解することにつながった。 ○各学期1回、個人面談を実施し、きめ細やかな対応を積み重ねたが、保護者からの要望はさらに寄せられている。 ○掲示板での子どもの活動紹介は定着している。その効果については、検証していきたい。

	項目	評価単位	評価のまとめ
B 大 学 の 附 属 学 校 園 と し て	I 大 学 と の 連 携	1. 連携研究	○観察など、継続して協力している。 ○発達臨床講座の先生方の研究協力は定着しており、研究の方向性を明らかにし内容の充実につながった。 ○エクセルは、大学及びびいずみナーサリーとの接点として今後も大事に取り組んでいきたい。
		2. 授業交流	○臨床実習の流れもスムーズになってきた。学生との話し合いも具体的な内容で有意義な時間だった。 ○事前打ち合わせや振り返りの時間がとりにくいが、メールを活用するなど工夫することで解決していきたい。
		3. 教育実習	○本学学生11名(4週間)を受け入れた。大学の指導教官やその他教官も参観に来られ、実り多い実習となった。教職への意欲を高めることにつながった。 ○概ね指導できていたが、教材研究・準備など、さらに計画的に行えるようにしていく必要がある。 ○学生も実習のイメージが持てない傾向が強くなっているよう。事前の説明や大学との連携をより密にすることが課題である。
		4. 専門委員会	○大学に直結した情報を得ることができ、それを委員が確実に園内に伝えることで情報の共有化を図ることができた。 ○職員会議で、各委員会からの報告が確実に行われ、情報が共通になった。
		5. 大学の講義担当	○附属幼稚園の保育の在り方を具体的に伝え、学生自身が感じ考えることを主体においた授業を展開し、幼児教育への理解を深めることにつながった。 ○保育をしっかりと伝えていくという大切な役割があり、現場の教員が講義する機会は有意義である。
		6. インターンシップ	○2名の学生を受け入れた。保育場面だけでなく、環境整備を中心に担当する学生もいたが、意欲的であった。
	II 社 会 貢 献	1. 参観・研修受け入れ	○海外・他府県等からの参観者を受け入れた。保育に影響をおよぼすことはないように事前説明を実施したり、施設見学やDVDを活用したりすることで、安定した保育環境を維持することができた。 ○海外からの参観者との出会いでは、自然な形で交流の機会を設定し、様々な人と出会い親しむ機会となり、効果的だった。
		2. 公開研究会開催	○公開保育を年2回実施した。年間で日本全国から、計約120名の参加者があり、活発な討議がされた。 ○公開保育では、大学教官の協力を得て、充実した話し合いをもつことができた。 ○幼稚園から発信していく大事な機会としてとらえ、今後も継続していきたい。
		3. 現職研修	○今年度は実施せず。東京ラウンドテーブルには、多くの教員が参加し、学び合いを体験することができた。
		4. 途上国支援	○途上国の教育関係者の参観の受け入れを積極的に行った。参観中も、子どもたちとのかかわりが自然にもたれた。様々な方と出会う日々を大切にしようという意識が定着したように思われる。 ○説明資料も充実し、積極的な協力ができた。また、継続する中で、子どもたちの交流も自然になってきている。
		5. 出版活動	○平成23～24年度紀要「環境に対する豊かな感受性を育む」を発行。 ○文部科学省、資料集作成協力者として事例の提供等、本園の保育を伝えるよう努めた。 ○季刊誌「幼児の教育」の編集・執筆に取り組み、内容の充実、季刊誌の周知に力を尽くした。
		6. 各種研究会への協力・支援	○日本保育学会の資料展に本園所蔵の資料を提供し、協力した。 ○松野クララ顕彰碑建設を推進した。その記録を「松野クララを忍んで～顕彰碑建設の記録」にまとめ、広く配布した。 ○小学校の実際指導研究会には全教員が参加した。 ○静岡県教育委員会主催幼稚園教育理解推進事業、長崎県私立幼稚園研修会で、「幼児の自己充実に応答する保育」について講演した。文京区立幼稚園教育研究会表現部会の講師を務めた。

平成23年度学校評価(自己評価)まとめ (課題)

<教育活動>

- ・全職員で連携をとり、幼児1人ひとりの確かな育ちにつながる保育を実現のため力を尽くした。
- ・園庭環境、室内環境の整備を進め、環境にかかわり豊かな遊びが生まれる保育を実現し、保護者からも高い評価を得た。

<環境・遊具>

- ・防災体制を見直し、環境の見直し、安全点検を徹底し、安全安心な幼稚園作りを確実にした。今後は備蓄用品の充実が課題である。
- ・アトリエや教材室の環境整備を進め、教材や遊具を幼児自身が選び活用し、豊かな遊びを展開することにつながった。

<安全>

- ・養護教諭を中心とした安全点検の実施、課題箇所の即時改善に努力した。
- ・緊急メールシステムの活用が定着したが、メールに不具合が生じるケースが数件あるので、月1回のテストメール送信を確実に行う必要がある。

<連携・研究>

- ・連携研究2年が経過した。各研究成果をもとに、さらに研究を深めていくことが課題である。幼小の遊び場(広場)が3月中旬には完成する。小学校と十分連絡をとり、幼小接続期研究につながる取り組みを、来年度4月から重ねていくことが課題である。
- ・「環境に対する豊かな感受性を育む」の研究成果を紀要にまとめ、関係各機関に配布した。

<社会貢献>

- ・国内外の教育関係者に対して、保育公開、施設見学、資料閲覧、教育内容説明などの機会を年18回開催、参加者は約120名だった。
- ・年2回公開保育を実施し、全国から延べ140名の参加者と保育のあり方について協議を深め、研究成果の発表を行った。
- ・日本保育学会資料展への資料提供協力、松野クララ顕彰碑建設協力、顕彰碑建設の記念しにまとめ、広く発信した。
- ・文部科学省資料集作成協力者、県教育委員会主催幼稚園教育理解推進事業講師等を務め、幼児教育の質の向上のために力を尽くした。